

恋は忘れた頃にやってくる

Kotomi & Sota

藍川せりか

Serika Aikawa

termity



エタニティ文庫

目次

恋は忘れた頃にはやってくる

5

書き下ろし番外編
初めてのバレンタインがやってきた！

325

恋は忘れた頃にやってくる

プロローグ

初めて足を踏み入れる高級ホテルのエントランスを眺めて、私は息を呑んだ。しっとりとした落ち着いた雰囲気の中、天井のアートワークがキラキラと輝いている。わあ……素敵。

こんな場所に来るなんて、友達の結婚式以来だ。

淡いピンクのワンピースに身を包んだ私は、慣れないヒールの音を響かせ、会場へ急ぐ。

——LOVENT. パーティ会場。

そう書かれたホールを見つけると、「よし」と気合を入れて中へ入った。

そこは、結婚相談所「LOVENT」に入会した人だけが参加できる婚活パーティの会場だ。二十七歳になったし、私もそろそろ結婚したいなーなんていう軽い思いで参加することにしたのだけど、想像以上にたくさんの人がいて驚いた。

最近では晩婚化が進んだり、自立した女性が増えたりしたこともあり、独身の人が多いとニュースでよく耳にする。

確かに結婚だけが幸せじゃないし、結婚がゴールだとも思わない。

だけど私は、やっぱり家庭というものに憧れるし、できれば子どもも欲しい。

きっとここにいる人たちは、私と同じような志しよを持っているんだろうな、と少し心強く思った。

パーティは立食形式で、テーブルには美味おいしそうな料理がいくつも並んでいる。それを目にした私は、ゆっくりと食事を楽しんでいる場合ではないとは分かりつつも、お皿に取って食べ始めてしまった。

「ん〜、美味おいしい」

近くを通った男性ウェイターからシャンパングラスを貰って、出合いそっちのけで舌つづみを打つ。

……って、こんなことをしている場合じゃないでしょ、私！

今日はわざわざ美容院でヘアセットをしてもらったし、最新のメイクを施ほどこすために百貨店で道具一式揃えてメイクレッスンもしたじゃない。

花より団子になってどうするの！

そう思いながらも、ローストビーフをはむっと頬張った。

私、田中琴美たなかことみ、二十七歳、彼氏ナシ——は、ベビー用品メーカー、ラブベビチルドレ

ン株式会社の商品管理部に勤めている。

平々凡々で目立つことなく、逆に地味すぎて周囲から浮くということもない、穏やかな毎日を過ごしているOLだ。

仕事は華やかではないものの、充実しているしやりがいを感じている。

残業はあるけれど、プライベートな時間がないわけじゃないし、大好きなカフェ巡りもできていて、大きな不満はない。

ただ、恋愛は昔から苦手で、今まで付き合った男性は一人だけ。

大学生のときに付き合い始めたその彼には、数カ月で『ごめん、他に好きな子ができた』とあっさりフラれてしまった。

もっとも彼は、周りが羨むくらいイケメンで、どうして私なんかと付き合ってくれるのだろうかと思議に思っていたくらいだ。

当然、告白されたときは、「騙されてる?」「ドッキリなんじゃないの?」と疑った。

そう、疑ったのだ。…疑っていたのだけれど、素敵な彼に舞い上がり、ハピネス状態になったところで急降下。

結局、「騙されてる?」の予感が的中した。どうやら男性経験のない女性を何人落とせるか、友人の間で競い合っていたみたいだった。経験値ゼロの私は、まんまとその罠に引っかかってしまったという散々な思い出だ。

短期間でもあんなイケメンと付き合いえたならよかったじゃないか、と友達からは慰められたけれど、当時の私は傷心のあまりワンワンと泣いて引きこもった。

そして心に固く誓う。

——二度とイケメンは信用しない、と。

そんな私は、今日ここに平凡でも誠実な男性を見つげるために来た。

会場のライトに照らされて、手にしたシャンパングラスの中の気泡がキラキラと輝く。妻く綺麗なだと見とれてみると、背後から声をかけられた。

「久しぶり、田中琴美さん」

え?

低くて落ち着きのある声にフルネームを呼ばれ、驚きのあまりグラスを床に落とすしそになる。

えっと、えっと……

……何が起こっているのか理解するまでに時間がかった。

私の前に現れたその男性は、長身ですらつとしたモデルのような体型をしており、嫌味なほどスーツが似合っている。

男らしい顔立ちでありながら、にこっと微笑む様は少年っぽくて可愛らしい。

どこからどう見ても素敵だけど、私は彼を一目見て顔が引きつり、金縛りに遭ったように動けなくなった。

「どうして君がこんなところにいるのかな？」

「……あの、え、つと……」

目の前の男性の名は、青山蒼汰^{あおやまそうた}。三十二歳でラブベビチルドレン関西支社のマーケティング部長だ。

本社に勤める私とは、オフィスも部署も違うのだけど、二年前まで彼は本社の同じフロアで働いていて毎日顔を合わせていた。

そのときに、ちよつといろいろあつて……

とにかく彼は、青山蒼汰という名を具現化したような爽やかなイケメン。それゆえ、私のとても苦手とする類の人……

そして、絶対に再会したくない相手なのだ。

「確か、恋人ができた、と聞いていたんだけど？」

「え、ええ……」

「それから、ゆくゆくは結婚するとも」

ううう……

彼に問い詰められて、言葉が返せなくなる。

私は以前、青山さんに告白され、「好きな人がいる」と言って断ったことがあるのだ。それからその人と結婚を考えている、とも。

「まさか、嘘だったの？」

「い、いいえ……そんな……」

「でもおかしいよね。こんなところにいるってことは、今、フリーってことでしょ？」
婚活パーティーに参加しているのだから、必然的にそうなる。言い逃れはできない。

「……そ、それよりも！ なぜ、青山さんがここに？ 関西支社勤務ですよね？」

「うん、本社に戻ってくるようになってね」

「そう……なんですか……」

ということは、また同じオフィスで働くことになるのか。思わず、顔をしかめる。

「あからさまに嫌そうにしないでくれる？」

「い、いいえ！ そんなことは！」

そうだ、別に嫌なわけじゃない。

青山さんは優しい上司で、凄く仕事ができるし、彼がいると会社が明るく華やかになる。

まだ業界に参入したばかりで、大手メーカーに負けないようにと頑張っているうちの会社に、ベビー用品最大手メーカーのビジュアルからわざわざ転職してきた、ありがたい人だ。

彼が来てからというもの、業績が著しく伸び、ブランドの知名度が一気に上がった。大手に勤めていた経験を活かしつつも、大手ブランドではできないような企画を立てたり、お客様からの声を積極的に商品に反映したり。安全面でも価格面でも評価の高い商品を次々と開発し、うちの会社を軌道に乗せた人物だ。

そんな青山さんのことを心から尊敬しているし、嫌いなわけがない。けれど……

彼は私の最も苦手とするイケメンという部類に属している男性なのだ。

こんな格好いい男性を裸眼で見ると、キケンだ。メガネで防御力をアップしなければ！

私は激しく動揺しながら、バッグの中から伊達メガネを取り出して装着した。

なぜか青山さんは、昔から必要以上に女性に気を持たせるような態度を取ることが多い。そして、そんな彼とはいろいろありすぎて、気まづいどころの関係ではないのだ。

どうしよう、これは史上最大のピンチかもしれない。

波乱の予感を覚えつつも、とりあえず苦笑いをした。

1

遡ること、二年前――

当時二十五歳だった私は、社会人三年目である程度仕事にも慣れ、毎日楽しく会社で過ごしていた。

「田中さん、このチャイルドシートの検査はもう終わってる？」

品質管理部長から声をかけられ、私はパソコンから目を離し、部長に向き直る。

「はい、終わっています。私と上野さん、山口さんの三人でチェックしました。特に大きな問題はありませんでした」

「そう、ありがとうございます。じゃあ、工場にメールしておいてくれる？」

「はい」

私は新モデルのチャイルドシートの品質チェックが済んだことを工場に知らせる。

私たち品質管理部は、製品の品質や安全性をチェックしたり、ユーザー様と直接やり取りをして改善点を検討したりする部署だ。

特に商品に不具合があつてはならないので、何度も何度も厳しく検査を行う。

もともと私は心配性だから、しつこいくらい確認するのは得意。入念にチェックをしすぎて先輩たちに呆れられることもしばしばあった。

でも、それくらいでちょうどいいと思っている。だって赤ちゃんは家族にとって本当に大事な存在なのだ。絶対に何かあってはいけない。

工場へのメールを確認して、これで完了だとホッと一息ついていると、オフィスの入り口から声がした。

「お疲れさまです！」

ハツラツとした声だ。

同じフロアに席があるマーケティング部の青山さんが外回りから帰ってきたのだと分り、私は顔を上げた。

彼は二年前に大手ベビー用品メーカーからうちの会社にやってきた男性。人一倍元気でテキパキと仕事をこなし、毎日忙しいはずなのに凄く楽しそう。

この仕事が本当に好きなんだろうな、と見ていて気持ちがいい。

コミュニケーション能力にも長け、どの社員にも分け隔てなく接し、誰からも好かれている。

私みたいな地味な社員にまで笑顔で話しかけてくれる、そんな素敵なお人……なのだけど、私的には、あまりかわりたかくなかった。

イケメンが苦手な私にはなんだか眩しすぎて、近寄られるとどうしていいか分からなくなるのだ。遠くから見ているほうが安全というか、なんとというか。

パソコンごしに青山さんをこっそりと見ていると、パチッと目が合ってしまった。

……げっ！

急いでパソコンの陰に隠れたものの、時すでに遅し。

「田中さん。この前の指摘どうもありがとうございます。抱っこ紐の新カタログにさっそく反映しておいたよ」

「……そうですか、それはよかったです」

そっけなく答えたのに、青山さんがこちらに近寄ってきた。爽やかな笑顔を向けられた私は、さっと視線から逃れるように俯く。

別にわざわざ個別にお礼を言われるようなことはしていない。

先日マーケティング部から新しいカタログのサンプルを貰ったところ、抱っこ紐の説明の中にも少し書き方を変えればいいのと思う箇所があった。

私たち品質管理部はユーザーと直接やり取りをすることが多いので、「こうだったらいいのよ」とか「こういうのが欲しい」という声をよく耳にする。

なので、キヤッチコピーを変えたほうがよりお客様に興味を持ってもらえるのではないか、と思ったことをちょっと口にしただけなのだ。

しかも彼ではなく違う人に伝えたのに、こうして青山さんからお礼を言われるなんて。女性社員たちの視線がこちらに集中して気まずい。

「田中さんって、いつも鋭い指摘をしてくれるから助かってる。さすがだね」
「……いいえ」

ブルーライトカットのメガネをくいっと押し上げて、私は俯うつむいたまま彼から顔を逸らす。

ああ、もう。早く向こうに行ってくれないかな……

青山さんは苦手だ。とにかく格好すぎる。

意識してやっているのか、そうでないのか分からないけれど、こんなふうによく微笑んだり、「気が利くね」なんて褒めたりされたら、大抵の女性はキyunとトキメクだろう。私はイケメンバリアーを張っているので彼の攻撃は効かないものの、実際にこの会社では彼を好きだと言っている女性も多い。

どうせだったら、この優しさを私に向けてのではなく、彼女たちに向けてほしい。

そう祈っていたのに、さらに話しかけられた。

「ねえ、そのメガネ、度が入ってる？」

「へえっ!？」

急に予期せぬことを聞かれて、私は思わず間抜けな声を出してしまった。

青山さんは私の顎あごに手を添えて顔を上げさせる。そして指でブリッジ部分を持って、ひよい、とメガネを取り上げた。

一体何が起きたのかと私は口をあぐり開けたまま、彼の顔を見つめる。

「入ってない。やっぱりそうだよね。後ろから見るとき、景色が歪よこんでなかったから」
ど、どどどど! どこからどうツッコんだらいいのか分からない。

どうして私が、顎あごクイをされているの？

そして、私のメガネのレンズを背後から見えていたって、なんで？

何がなんだか分からなくて、ただただ混乱中!

私は視力がよくてメガネなんて必要ないが、あまりにも青山さんが眩まぶしいからプロテクターとしてかけていたのだ。それが、こんな簡単に外されてしまうなんて。

ふと彼の秀麗な顔が近づいてきていることに驚いて、呼吸を忘れる。

「メガネをしていると聡明な女性に見えるけれど、外すとあどけなくて可愛いんだね」
「なっ、な!？」

あなたは一体、私をどうしたいの!

メガネを外されてしまって防衛力ゼロの私は、モロに彼の言葉責めを受けてしまった。あまりの攻撃力に耐えきれなくなり、彼の手からメガネを取り返して覚束おぼつかない手つきでかけ直す。

「や、やめてください！」

「ごめん、つい」

あまりにも必死に奪い返したからか、青山さんは申し訳なさそうな表情で私を見つめている。

そうですよ、申し訳なく思ってください、急にこんなことをされたら困ります!!
せつかく平凡に生きているというのに!!

「田中さん、ごめんね」

ううううっ。そう思っているなら、早く私から離れてください。

再び視線を外して俯うつむいていると、彼はやっと私から離れていってくれた。

周囲の視線が痛い。大きな声を上げてしまったので、何事かとこちらを見ていたのだろう。

女性社員たちの眼差まなざしには羨望せんぼうと嫉妬しつとが混ざっている気がする。

別にこれは嬉しい出来事でもなんでもないんだから。私にとってはとても迷惑なことなんです!

無駄だと知りつつも声に出さずに言い訳する。

それにしても、青山さんは離れていったのに、まだ胸のドキドキが止まらない。

すっかりしろ、琴美! もうイケメンに近寄ってはいけない。絶対に!

それから数日後、青山さんの転勤が発表された。関西支社のマーケティング部部长に昇格するそうだ。

これで不必要に構われることはなくなるのだとホッとしたのと同時に、少し寂しい気もする。

青山さんがうちの会社に来てから社内の雰囲気が一気に明るくなって、親睦会と称した飲み会が頻繁に開かれるまでになった。

そのおかげで、社員の間に信頼関係ができて仕事が円滑に運ぶようになっていた。

いつも皆の中心で場を盛り上げていた青山さんがいなくなるのを残念に思う気持ちもあるのだ。

まだ実感が湧かないなー、なんて考えていると、青山さんから急に名前を呼ばれた。

「田中さん。俺の送別会、絶対出席してね」

「え!? げほっ……ごほごほ!」

突然の呼びかけにむせてしまう。ぶわっと汗が噴き出て、顔が熱い。絶対に赤くなっているはずだ。

「青山さん、なんで田中さんをご指名なんですか?」

私が返事をする前に、青山さんの隣にいた男性社員が冷やかすように彼を肘ひじでつつ

んとつついた。すると青山さんがにこっと私に視線を送ってくる。

「田中さん、飲み会にあまり来てくれないから。最後まで参加してほしいなと思って」「だってー、田中さん！ 青山さんから直々のご指名だから、参加でいいよね？」

なんでそんなこと言うかなあ！ 皆の前で言われたら断れなくなるじゃない。

あわあわしながらも、無言で頷く。

「よかった」

もう、なんなの、その嬉しそうな顔は。

こうやって気を持たせるようなことをされたら、好かれてるんじゃないかと錯覚しうになる。

大方、青山さんは、飲み会参加率の低いレアキャラを誘って喜んでいるだけなのだろう。それ以上でもそれ以下でもない。

こんな思わせぶりの態度に振り回されるのも、これで最後だ。

断るチャンスもなさそうだし、最後まで参加しておいてもいいかな、と私は送別会の参加を決めた。

そして青山さんの送別会、当日。

場所は会社の近くにあるイタリアンレストランに決まっていた。

カジユアルな雰囲気、美味^{おい}しいのにお値段はリーズナブルなお店だ。

外観は赤と白のレンガを組み合わせた可愛らしいデザイン。店内も家庭的で温かみがあつて、なんだか懐かしい感じがする。

本格的なパスタやピザ、チーズフォンデュの他に、サラダバーもあつてフレッシュな野菜が食べ放題。その上デザートもケーキやムース、タルト、パンナコッタなど、好きなドルチェが選べるコースを頼んだそうだ。

ああ、今から楽しみ。

いつもは、ダークカラーのカディガンにパンツ、もしくはひざ下くらいのスカートという地味な格好の私だけど、今日は素敵なお店に入っても恥ずかしくないように少しだけオシャレしてきた。

別に青山さんの送別会だから気合を入れたというわけではない。

とろみのある白いシャツにミモレ丈のスカート。

これならそこまで派手でもないし、ちょうどいい感じはず。

ところが、朝から青山さんの視線をビンビンキャッチして、なんだか居心地が悪い。似合っていないと思われているのか、いつもと違うから変だと思われているのか。

あまりジロジロ見ないでほしいのだけど、そんなことは言えず、気ままに就業時間を作り過ごした。

「じゃあ、青山さん、お疲れさまです！ 関西支社でも頑張ってください！ かんぱーい」
 やつと仕事が終わわり、始まった送別会。

隅の席に座るつもりだったのに、店に入るなり青山さんから「田中さんはここね」と、お呼びをかけられた。なんと私の席は彼の隣になってしまふ。

なぜ……っ!?

私は品質管理部の人たちと静かに食事を楽しみたかったのに！

私の周りには青山さんと上層部の面々、それからマーケティング部の男性たちがざらつと座っている。そして、私が一番若手なので、料理の取り分けに追われた。

「田中さん！ サラダを取ってください。お願いしまーす」

「あ、はい」

「深田さん、ズルいです。僕のもお願い」

「は……はい」

マーケティング部の深田さんに声をかけられると、すかさず青山さんも頼んでくる。二人のお皿を預かって、私は目の前にある木製のサラダボールから野菜を取り分けた。

「ねえ、田中さんが奥さんだったら、こうしていつも取り分けてもらえるのかな？」
 また青山さんが変なことを言い出した。

ドキ！ じゃなくて、ギクツ。

私は体を強張らせる。

「青山さん、そういうの、セクハラになりますよ」

「ええ？ そうかー。それはいけないな」

深田さんにツッコまれた青山さんは、はは、と困ったように微笑んだ。

確かに他の男性が女性社員に言うセクハラだととられかねないセリフだけど、青山さんだと不思議と嫌悪感を抱かせない。

イケメンってこういうとき、ズルいよね。

私ですら、「嫌だ、放っておいて！」と思うのと同時に、心の奥のほうでは嬉しく感じている。

そんな気持ち悟られないように、私は平静を装った。ああ、つくづく素直じゃないな。私の隣で美味しそうにご飯を食べ、ワインを飲んでいる青山さんをちらりと見る。「もうこれからは会えないんだな」と感傷的になってしまった。

青山さんはワインボトルを私に向けてくる。

「はい、どうぞ。ワイン美味しいよ」

「どう……も」

青山さんから赤ワインを注がれた。あまりワインは飲んだことがなかったけれど、彼

に勧められるがままグラスを口に運ぶ。

芳醇ほうじゅんな香りに誘われ、何度も口に含んでしまう。

「どう？ 飲めそう？」

「はい。私、ワインってあまり飲んだことがなかったんですけど、美味しいですね」

「よかった」

勧められるだけワインを飲み、目の前の美味しい料理を堪能していると、なんだかふわふわと心地よくなってきた。

隣にいるはずの青山さんの声が遠く感じられ、周囲の声もハウリングしているみたいだ。

ああ、楽しい。このままずっと、ふわふわしていたい。気持ちいいな……

一次会は二時間程度でお開きとなり、そのまま二次会へ行く流れになった。

明日は土曜日で休みだし、「青山さんの歌が聞きたい」という女性社員からの要望で、

二次会はカラオケに決まる。

いつもなら絶対に一次会で帰るのだけど、今日は青山さんに腕を掴まれて帰らせてもええ、私も二次会に行くことになってしまった。

カラオケルームに入り、青山さんの歌っている姿をぼうっと見る。イケメンな上に歌までうまいのかあ、と感心していると、深田さんが隣にやってきた。

「田中さん、大丈夫？ もしかして青山が異動になるから、ヤケ酒しちゃったクチ？

結構ショック受けている女子、多いからなあ」

「違いますよ。私はそんなんじゃないから」

「はは、まあ、隠さなくても……」

「ほんとに、違うんれす！」

そんなわけないじゃない。私は青山さんのことなんて、全く――

「二人で何を話してるの？」

「おお、青山」

歌い終わった青山さんが、私と深田さんの傍そばにやってきた。そしてさりげなく私の隣の席に座り、ぴったりとくっついてくる。……これはなんの嫌がらせなのかな？

「凄く仲よさそうに見えたけど、何を話していたんだ？」

「大した話じゃ……」

深田さんの言葉に被せて、私は会話を切ろうとする。

「そうですね」

けれど、青山さんにはっこりと微笑んだまま、詳細を聞かせると言わんばかりに深田さんを見つめ続けた。

「青山が気にするようなことは話してないよ」

「……そう？　ならいいんだけど」

酔っているせいなのか、会話の内容が頭に入っていない。ただなんとなく、二人の間の空気が悪い気がしたので、私は話を切った。

「あの……私、そろそろ……帰ります、ね」

「え？　もう？」

青山さんがなぜか焦った顔をする。

「はい」

「じゃあ、送るよ」

「いえいえ……。結構です。だって青山さんは今日の主役だから……。抜けたら、だめですよ」

誘いを断り部屋の外に向かうけれど、青山さんはどこまでもついてくる。

照明を落としたカラオケルームは暗く、私たちが抜け出したことに気が付く人はいないみたいで、誰も追いかけてこない。

このままついてこられたら困るのできっぱり断りたいのに、歩き出したせいでお酒が回り足元がふらついてしまう。

「大丈夫？　送るよ」

「大丈夫……です、から」

「大丈夫じゃないよ」

突然、ぐっと強く肩を引き寄せられて、私の体は彼の腕に包まれた。

ど、どうしよう。こんなふうにも男性に抱き締められるなんて初めてで、ますますクラクラしてしまう。

私よりも遥かに大きな体を感じて胸の鼓動が速くなった。

その上、私、凄く酔っているみたいだ。気分が悪い。

「田中、さん？」

「うう……」

目の前がぐるぐると回り出して、支えてもらわないと立っていられなくなる。

自分の名前を呼ぶ声が遠くに聞こえるけれど、それ以外の言葉は何を言っているのかわからない。

青山さんに抱き締められたまま、私の意識は暗闇に落ちていった。

「田中さん。……いや、琴美ちゃん」

「ううん……」

私の名前を呼ぶのは誰……？

「琴美」

甘く優しい声色で、そつと囁くように名前を呼ばれる。

なんだろう、体がふわふわする。熱くて、苦しい。

全身に染みるような声にゾクゾクしていると、そつと肩に手を置かれた。

「服、苦しい？」

「くる……し……」

「脱がせても平気？」

「あい……」

衣擦れの音がして、窮屈さから解放される。私はふう、と息を吐いた。

いつの間にか横になっているみたいだ。ふかふかのお布団の上において、ごろんと寝返りをうつことができる。気持ちいい。

うつ伏せになると、髪を梳かれた。肩に温かくて柔らかい感触がする。どうやら肩にキスをされているみたいだ。

「下着も脱がそうか？ 苦しいでしょ？」

「んー……」

「外すよ」

「あい」

ちゅっ、と甘い音を立てながら、柔らかいものが腕や背中にも触れてくる。大きな手が肌の上を滑り、その温もりに心地よさを感じた。

「……ああ」

ブラジャーのホックが外されて、さらに締め付けるものがなくなる。そして何もつけない背中の上を、指がそつとなぞっていく。それだけで私の口からは吐息が漏れた。

「は、あ……」

「今日、いつもより色っぽい格好していたよね。どうして？」

「どう、して……って」

「俺がいなくなるから、少しでもオシヤレしようとしてくれた？」

俺が……いなくなる？

ああ、青山さんか。

そこでやっと、背中を撫でているのが青山さんだと理解した。

ほんやりとした頭で彼の言葉を考える。朝からジロジロ見られていたのは、そう思われていたからだったのか。別にそんなつもりは……。せつかく飲み会に参加してほしいと言われたから、それ相応の格好をしようと思っただけだ。

でもそれって、そういうことになるのかな……？

酩酊した状態で、そんなことを考える。

「こんな可愛い格好したら、他の奴に狙われるんじゃないかって、凄くハラハラした。これから俺がいなくなるっていうのに心配だ」

「ふえ……?」

一体何を言っているのだろうか?

「いっぱい飲ませてごめんね。俺、ズルい男だから……。離れる前にどうしても君が欲しかった」

「あつ」

解放されたバストに手を伸ばされ、包み込むように揉まれる。その手に何もかもを支配されているみたいで抵抗できない。

「琴美……」

「あつ、ん……。や……。あ」

青山さんは胸を揉みしだきながら、首筋に口付けをしてくる。そしてその唇は耳へと移り、吐息まじりの声で名前を囁いた。背中がゾクゾクする。

「可愛い」

かわ……。いい? 私が? そんなわけない。

「こんなに可愛い格好、俺以外の男の前でしないほしい」

胸の先を見つつけられて、指先で転がされる。くにくにと摘ままれたり、押しつぶすように触れられたりして、全身に快感が広がっていった。

「待……。て。あつ……。だ、めえ……。こういうの……」

久しぶりの感覚に戸惑う。

こういうことをしたのは、もう思いだせないほど前だ。大学生のときに付き合っていた人と経験して以来、何もしていない。その彼とは初体験をしてすぐに別れたので不慣れだし、苦手で……

「俺が嫌ってこと?」

「そ……。じゃなくて」

「じゃあ、何?」

「こういう、の……。慣れていない、から」

「もしかして、初めて?」

「初めて、ではないけど……。でも」

経験人数は一人で回数も片手で数えるくらいな上に、痛かった思い出しかない。あのときみたいに、痛みに耐えるのは嫌だ。

「痛い、やだから……。止めてほしい……」

「セックスが痛いのか?」

「初めてのとき……痛かったから。だから……」
 ああ、私、何を口走っているのだろう。酔った勢いで今までのことを話してしまった。
 「そう。分かった、優しくする」
 「え……?」

「じゃあ、痛くない、本当のセックスしよう」
 どういう、こと……?」

彼の言葉の意味を考えているうちに、私の体は反転し、仰向けにされてしまった。

目の前には熱い視線で私を見つめる青山さんがいる。その瞳の奥に雄々しい欲情が宿っている気がして、目を逸らせなくなった。

こんな近くで彼の顔を見るのは初めて。

奥二重の綺麗な目は誠実そうで、少年のような雰囲気なのに、全体の印象は男らしい。口角がきゅっと上がっていて、今すぐに触れたくなるような魅惑の唇の持ち主だ。

非の打ちどころのない端整な顔立ちに思わず魅了される。

イケメンパワー恐るべし。

「好きだよ、琴美」

いつの間にか青山さんはスーツを脱いでいて、私は裸の彼にきゅっと強く抱き締められた。

これは夢? そうだよ。こんなこと、現実では起こりえない。じゃあもう、この素敵な夢に溺れてみるっていうのもアリかも。

イケメンに弄ばれまいとして青山さんを過剰に避けていたけれど、夢なら傷つけられることはない。

「いっぱい気持ちよくしてあげるから」

「はい」

「もう、本当に可愛すぎる」

私たちは見つめ合い微笑み合ったあと、恋人同士みたいに唇を重ねた。

キスをしているだけなのに、とろけてしまいそうなくらい気持ちがいい。ずっと触れ合わせていたいと思うほどの口付けに酔いしれていると、彼の手が再び胸を揉み始めた。

「ん……っ、ふう……」

彼の舌が私の中に入ってきて、舌を絡ませ合うように動いた。

青山さんとのキスに溺れて、何も考えられなくなっていく。

ふいに胸の先を指先で擦られ、声を上げそうになった。けれど唇を彼に塞がれ、舌を濃厚に絡められているので、言葉にはならない。

「う……ん、ふ……あ……」

胸の頂を押されたり、少しだけ強く擦られたりして、そのたびに体が大きく揺れる。

キスを終えた彼の唇は、私の首筋を通り過ぎていった。

「……あつ」

やだ、何この声？ 鼻にかかったとろけた声は、自分のものじゃないみたい。

「可愛い声。もっと聞きたい」

「……や、だ……あつ！」

とろりと熱い感触がしたので驚いて胸元を見ると、青山さんがツンと張り詰めた胸の尖りを舐めていた。色っぽい舌先をくるくると動かして、ちゅつと吸い上げる。

「あ、……あつ、んん……」

「声、抑えないで」

「で、も……。こんなの、恥ずかし……」

「大丈夫。凄く可愛いから」

可愛い、可愛いと何度も言われているうちに、可愛いの意味が分からなくなってくる。私なんかに対して使う言葉じゃないと指摘したいけれど、ゾクゾクとした快感に吞まれて言葉を失う。

胸を舐められている間にも、彼の手が体のありとあらゆるところを撫でる。肩や腕、腰、それから太ももやお尻まで。

「琴美の肌、凄く気持ちいい。ずっと触れていたい」

「あ……ん……。はあ……」

際どいところを撫でられるたび、体が熱くなっていく。

どうしよう、なんだか体がムズムズする。特にお腹の奥が熱くて、変な気持ちになってきた。こんなふうに隅々まで体に触られることなんて初めて。

それだけでは物足りなくて、もっと何かが欲しくなり始めている。しかしそれがなんなのか、うまく説明ができない。

突然、シヨーツの上からクロツチ部分をすつと撫でられた。

「やあつ！」

な、何!? 今の。凄く気持ちよかった。

すでにそこは熱くなっていて、下着が張り付くくらい濡れている。

「青山さん！ もう、やめて。こんなの……だめ」

「こんなに熱くなっているのに？」

「ああ、ん……っ、や、ああ……」

さつきは掠める程度だったのに、今度は容赦なく触れてくる。布越しに何度も擦られ、ビクンと腰が大きく揺れた。

「凄く濡れているよ。よかった」

「よかつ、た……んですか？」

「そう。俺に感じてくれたってことでしょ？ だからいっぱい濡れてくれたら嬉しい」
 そう、なの……………」

前は緊張で体がカチコチだったせいとか、全く濡れなかった。

これは夢だし、今日はお酒に酔っているからリラックスできているのかも。それに青山さんとうとうしてキスをしたり、肌に触れられたりしていると気持ちがいい。

恥ずかしい気持ちもあるけれど、優しくリードしてくれるから安心できる。そんなことを考えている隙に、ショーツの中に手を入れられていた。

「あ！ 青山さんっ——」

「ふふ、中はもつと凄いな」

彼は濡れそぼった秘部に指を這わせると、優しく媚肉を開いた。

「ああ……………っ、やあ……………！」

「本当、たまらない。君とこんなことしているなんて。俺、暴走しそう」

「だめ……………っ、そんな、ふうに……………しちゃ……………」

くちゅ、くちゅと淫猥な音をたてて、ゆっくりと指が挿入されていく。たつぷりと濡れているせいとか、痛くない。むしろ気持ちよくて早く奥まで来てほしいくらい。

さつき漠然と欲しいと思ったものは、これだったのかと気が付く。

「ちゃんと優しくするから、安心して」

「ああ、あ……………っ、ん、ん……………あ、はあ……………」

奥まで彼の指が入ると、体が勝手に戦慄き、中をきゆうっと締め付けた。

焦れるくらいにゆっくりと抜かれたかと思えば、ぬるぬるの指は再び奥へ進む。あまりの愉悦に青山さんの体に抱き付くと、頬を摺り寄せられキスをされた。

「んっ……………ん……………」

青山さんのキス、なんて気持ちいいんだろう。ずっとしていたい。

映画で見えるような情熱的なキス。甘くて濃厚で、凄く愛されているみたい。ふわふわした頭の中で、そんなことを繰り返す思う。

極甘な感覚にとろとろに溶けた。

「そんな顔で見つめないでくれる？ 我慢できなくなる」

「ふえ……………？」

一体私はどんな表情をしているのだろうか？

困ったようにはにかむ青山さんは、再びキスをしながら指戯を始めた。

今度は媚壁を擦るみたいに緩やかに中をかき混ぜる。

「あっ、あんっ……………やあ、ああ！」

「……………大丈夫？ 痛くない？」

「あ、痛く、な……………あっ、あっ」

「じゃあ、気持ちいい？ 続けていい？」

「ん……、…………、ああ、……ああっ」

全然痛くない。気持ちよくて、やめないでほしいくらい。

優しい手つきで中を擦られたそこは、ぐちゅぐちゅと音をたてて蜜を溢れさせていた。このまま擦られていると、どうにかなってしまいたいそう。

触れられている間に、太ももまで濡れてしまっている。とめどなく溢れる蜜に恥ずかしくなった。

「じゃあ、ここも……いいかな？」

「ひゃあ!？」

脚を広げられ、もう片方の手で花芯を刺激される。

触れられた瞬間、電流が走ったみたいに快感が駆け巡った。

「や、あ………なに………に、これ………ああうっ」

「いっばい気持ちよくしてあげる」

「あ、あ………あっ、はあ………ああん！」

甘い声が止められない。今まで体験したことのない快感に襲われ、目の前が霞む。意識が弾け飛んだ。

何も考える余裕がなくなって、息が上がる。

「だめ………っ、青山さ………ああ」

「大丈夫、俺に全部預けて」

強く逞しい腕にぎゅっと抱き寄せられて、愛撫もどんどん加速される。その熱い抱擁も、激しい愛撫も、時折与えられるキスも、全てが気持ちいい。

全部青山さんで染まる。

「あ、ああ——」

彼に導かれるまま、私はどこかへ飛ばされるような感覚に包まれた。

「………はあ、はあ………」

「琴美、凄く可愛かった」

何、これ………？ 一体、私はどうなったの？

指を抜かれた蜜口は、甘い痺れで熱いままだ。

今まで味わったことのない感覚に戸惑いながらも、この先に進んだらどんなふうになるのか体験してみたい気持ちでいっばいになっていた。

——これは夢、だもんね。どれだけ乱れたとしても、平気だ。いつもの私と違って大胆になっても恥ずかしくない。

「気持ちよかった？」

「はい。凄く………。こんなの初めてです」

「そう。良かった」

このまま最後までしたい。

青山さんは格好よくて、非の打ちどころのない人で、私とは雲泥の差がある。天と地がひっくり返ってもこんなことになるはずがないのに、まさか彼とエッチするなんて。どうしてこんな夢を見ちゃうのだろう。

苦手だからと遠くから見ているだけだったけれど、私、実は憧れていたの？

いやいや、そんなはずはない。そんな憧れを抱くことさえ申し訳ないくらいの人なのだ。

「入れていい？」

「はい」

とろんとした目で彼を見つめると、それに応えるように口付けをされる。しばらくして、準備を終えたようので、彼はそつと脚の間に体を入れて体勢を整えた。

「リラックスして」

「……はい」

知らないうちに強張^{こわば}っていた体を撫でられて、私は力を抜こうと深呼吸する。すると彼のもが私の入り口を擦^{すく}った。

「……あ」

熱くて硬いものがそこにある。私から溢れた蜜を自身に塗り付け、狙いを定めるよう

に何度も動く。それを繰り返されているうちに、彼を受け入れる心の準備が整ってきた。

——早く来てほしい。

胸を高ぶらせながら、心待ちにしていると、ぐぐつと奥へ押し込まれた。

彼が来た瞬間、衝撃が走る。痛くはないけれど、指よりも遥かに太くて大きな屹立^{きりりつ}に驚いてしまった。

「……っ」

「大丈夫？ 痛くない？」

「痛く……は、ないけど……」

「ないけど？」

「……っ、青山さ……の、おっき……くて、っ……」

狭い蜜道を通る彼のは、想像以上に太い。あまりの圧迫感に苦しくなる。

「ありがとう。それは俺にとっては褒め言葉だけど……今の状況的には、よくない意味だよね？」

「ちが……っ、あ、ああ……」

苦しいけれど、痛くはない。私の中に青山さんが来ているって、強く感じる。それよりも私の様子をうかがいながら、痛くしないようにと気を遣ってくれる彼の態度が嬉しい。

少し目を開いて彼を見ると、心配そうな表情でこちらを見ていた。こんなふうな女性を大事に扱えるなんて、夢の中の青山さんは本当に素敵な男性だ。

「ねえ、俺のほうを見て」

「……はい」

言われた通りに青山さんを見上げると、彼の額には玉のような汗が浮かんでいた。

「こうして琴美と一つになれて嬉しい。琴美の中、凄く気持ちいいよ」

青山さんの言葉を聞いて、ぶわっと一気に体温が上がった。

私の中って……気持ちいいの……?」

そんなこと、初めて言われた。それに青山さんってば、艶めかしさが増していて、ますますセクシーな表情になっているんですけど！

男性なのにとっても色っぽい。そんな顔見せられたら、ドキドキして照れてしまう。

「キスして」

「……はい」

ねだられて、私は目を閉じ唇を差し出す。ちゅ、ちゅと可愛らしい音をたてながら唇を重ね、舌を出して絡ませていると、接合部がだんだん彼の大きさに馴染んできた。

「俺……動かなくてもイキそうなくらい、興奮してる。ヤバイな」

「そ……なんですか?」

「でも大丈夫。頑張るから」

が、頑張るって何を……?」

ほんやり考えているうちに、彼の腰がゆつくりと動き始めた。

「あ、う……」

「大丈夫?」

「はあ……っ、あ、ああ……っ、んう」

最初はゆつくりと。でも少しずつ起伏をつけて浅いところで動いたり、奥まで差し込まれたりされる。一番奥の、もうこれ以上入れないというところまで彼が来ると苦しい。でも凄く深いところが密着していて嬉しかった。

「琴美……」

何度もキスをして、それから揺さぶられて。

苦しいばかりだったのが、だんだん新しい感覚に変化していく。これが快感なのだと分かるころには、彼の腰は大胆に動き始めていた。

「あんっ……あ、ああ……ッ、ン、は、あ……っ、ああ」

今までの苦しい経験はなんだったのと思うくらい快感に包まれ、行為に没頭していく。我を忘れた私はベッドのスプリングの激しい揺れに合わせて喘ぎ続けた。

「琴美、俺を見て」

汗で額に貼り付いた髪を直した彼が、私を熱く見つめている。

「よくなってきた？」

「あ、う……ン、あつ……！」

ずん、と深いところに打ち付けられる。固く閉じていた隘路は、すっかり彼に馴染んで開き、抽送されるたびに悦んでいた。

「痛いなら、この辺りにしておくけど？」

そのままじゃ抜けちゃう、と思うほど浅いところまで抜かれて、私は思わず腰を動かしてしまった。

「や……あ」

「だって久しぶりだつて言っていたから。あまり無理をさせてはいけないよね？」

「痛く……は、ない……から……っ、あ……あんっ……」

浅い場所も気持ちいいけれど、さっきしていたみたいにもっと奥に来てほしい。それに少し荒っぽくもされたい。

一番深いところが触れ合ったら、クラクラするほど気持ちよかった。だから、もっと……

いくら夢でもそんなことは言えなくて、私はモジモジとしながら腰を浮かせ、彼を見つめた。

「じゃあ、この辺？」

「ああっ、ふ、あ……ん、や、ああ……そこ、じゃ……な、……ああっ」

少し奥まで入れてもらえた。けれど、そこじゃない。もっともつと奥。私たちの肌がぴったりとくっつくほど貫いてほしい。

「琴美が教えて？ 君のこと傷つけたくないから、どこがいいか教えてほしい」

優しい表情と声だけれど、凄く意地悪だ。そんなこと恥ずかしくて言えないよ。悲しくなつて涙が浮かぶ。

「ねえ、ここでいいの？ 琴美がしてほしいなら、もつと奥まで入れることもできるけど」

「ん……んう……っ、はあ、あ……」

焦らされ続けて理性が崩れ、体が本能に支配されていく。迫りくる欲求に、気が付けば口を開いていた。

「も、っと……奥に、……っ。いっぱい……して」

「いっぱい？」

「うん……青山さんの……気持ちいい、から、あ……、もっといっぱいしてほし……っ」

「……っ。いいよ。よくできました」

先生が生徒を褒めるみたいに頭を撫でられたあと、腰をぐつと掴まれる。すぐにずんつと全身が揺れるほどの衝撃が走った。

「あ、ああっ……………」

目の前がチカチカと光って、快感だけが全てになっていく。少しずつ激しさを増すリズムに溺れて、愉悦に呑み込まれた。

「琴美……………」

吐息まじりの低い声が私の名前を呼ぶ。

「青山さん……………」

応えるように名前を呼んで、首に手を回し、ねだるみたいに彼の耳にキスをした。

「そんなことをしたら、イキそうになるだろ」

「まだ……………こうしていて」

離さないで、ずっと繋がっていたい。あなたとこうしていると凄く心地いい。一つになっっているこの瞬間が、限りなく愛おしいと思う。

「分かった。琴美、おいで」

「……………あつ」

繋がったまま腕を掴まれて体を起こされた。向かい合って座るような体勢になる。

「あん……………つ、青山さ……………。これ、深い……………よお……………つ、あ……………あ」

「いっぱい入っているだろ？俺たちが繋がっているところ、よく見て」

動きを止めて脚を広げられると、彼が入っている場所が鮮明に見える。

「あ……………ああ……………恥ずかしい……………から……………つ、やあ、ん……………」

男性のそういう場所を見るのも、自分の体に男性が入っているのを目の当たりにするのも初めてで、とても恥ずかしい。

目を逸らすと、ふふつと笑い声が聞こえて頬にキスをされた。青山さんは私をいじめて楽しんでいるみたいだ。

「俺と琴美、繋がっているよ」

「やあ……………つ、あ……………」

「可愛いよ、琴美。たまらない」

私の中の彼が先程よりも張りつめた。中をじっくりと擦って刺激を与えてくる。

「あ、ああ……………つ、ああ……………」

彼の屹立^{きつりつ}だけでも気持ちいいのに、同時に花芯まで刺激されて、きゅううつと膣内^{ちうない}が収縮した。中の彼を離さないというように何度も締め付け包み込む。

「……………つ、締まってる。気持ちいい」

「ああつ、青山さ……………つ、はあ……………気持ちいいよお……………」

そこからはもう何がなんだか分からなかった。

再びベッドに押し倒されて何度も何度も激しく揺さぶられ、意識が朦朧^{もうろう}としていく。

激しく揺れ動く腰に、軋^きむベッド。

あまりの愉悅に耐え切れず私は彼の腕をぎゅっと掴んだ。

「壊れ……ちやう……っ、も……だめえ……」

「いいよ、壊れて。俺も追うから」

「やあ……っ、あ、ああ——」

中が焦げるように熱くなり、強烈な快感が体中を駆け巡っていく。そのもの凄いスピードに自分が自分でなくなった。

「琴美、好きだ……」

「ああ……っ、あ、あああ！」

もう、だめ！

目の前が弾けて真っ白になる。

青山さんが「好きだ」と何度も言っている気がするが、はつきりしない。頭の中にふわふわと霞がかかっているようだ。

「イクよ、琴美——」

情熱的に激しく貫かれる。最後に奥まで押し込むと、私の膣内で彼が脈打った。

頭の中も体も痺れてとろけてしまったみたい。

彼がいなくなっても、下腹部はヒクヒクと余韻に震えて快樂の熱に侵されたままだ。

これが青山さんの言う「本当のセックス」というものなのかな……

どうして恋人たちは体を重ねるのだろうと疑問に思っていたけれど、分かった気がする——

でも夢なんだけどね。

これは、恋愛経験が少ないことをコンプレックスに感じていたらしい私の作り出した妄想。

現実がこんなふうだったらいいな……

朝。

——朝？

ズキズキと痛む頭を押さえながら、雲の上にいるみたいなふわふわの布団から私は顔を出す。

えっと、昨日は青山さんの送別会で、初めてのワインに感動してたくさん飲んで、それから……？

ああ、だめだ。昨日のことを考えると頭痛がしてよく思い出せない。それにしても、いつもより温かいのはなぜだろう。

ごろん、と寝返りを打つと、何かに当たった。

「ん……
ん？」

聞き慣れない声が聞こえて、勢いよく目を見開く。

い、今、男性の声がしたよね？ それから今私の体に当たっているのは、人の体？

え、え……何、ナニ、なに!?

パニックに陥りながら隣を見ると、そこにはなんと青山さん！

——ナニコレ。

思考停止中。

「へえっ!？」

嘘、嘘でしょ!!

私が最も苦手とする人種である、イケメンの青山蒼汰さんがなぜここに？ って、ま

ずここはどこ？

真っ白いお布団に真っ白の壁。大きな液晶テレビがあつて、凄く大きな窓があつて——

とにかく私の家じゃない!!

それからそれから、私、何も着ていない！ 服だけじゃなく、下着も。

勢いよく起き上がって布団の中を見ると、見事な素っ裸だ。私は急いで布団で自分の

体を隠した。

まだ眠っている青山さんも、見えている範囲は裸……

ぎゃあああ。

まさか、これは、俗に言う「酔った勢いでヤッチャった」ってやつ!?

どうしよう、どうしよう！ 今まで目立たず平和に穏やかに過ごしてきたというのに、

何この大事件！

これは私のキヤバを軽く超えていて、状況把握に時間がかかる。

ただ酔っぱらって介抱されただけ？ それにしてはガッツリ脱いじゃっているよね。

あ、でも脱がせただけってこともある——わけないよね、大人だものね。

それになんだか体に違和感がある。今まで使ったことのない筋肉を使ったせいである

う疲労と痛み。それから下腹部に異物感。

これは絶対にアウト——

状況を受け入れられずテンパっていると、青山さんが目を覚ました。

「田中さん、おはよう」

今すぐ出社できるくらいの完璧なイケメンっぷりでにっこり笑う。

なんとも爽やかな寝起き。うちの弟なんて、寝起きはボサボサ頭でヨダレの跡なんか

あつて、こんなに清潔感の漂う顔してたことないよ。

立ち読みサンプル はここまで